おれんじニュース

No. 234
2009年9月号

朝もやの穂高　7/28

★集会・委員会・行事関係のお知らせ★　★山行の一歩は会合から★

	9月			10月		
運営委員会	8日(火)	19:30～22:00	西諫早公民館	6日(火)	19:30～22:00	西諫早公民館
ひまわり集会	4日(金)	13:30～15:30	西諫早公民館	2日(金)	13:30～15:30	西諫早公民館
全体集会	22日(火)	19:00～22:00	西諫早公民館	20日(火)	19:00～22:00	西諫早公民館

★市民ハイキング教室：10/7, 14, 21(水曜日)開催

９月の山行計画

部	技術研修部	自然保護部 ひまわり	山行部
月　　日	１２日(土)～ １３日(日)	２３日(水)	２７日(日)
山　　名 (行事)	熊本脊梁山地 白鳥山(1639m) 時雨岳(1546m)	岩屋山(475m)・上浦～	県北の山 白岳・不老山と 鷹島大橋見物
地　　図	不土野	長崎西北部	
集合場所	JR 諫早駅裏 6:00	JR 諫早駅発 7:57	JR 諫早駅裏 6:20
	JR 西諫早駅 6:10	JR 西諫早駅 8:01	JR 西諫早駅 6:30
帰着時間		17:00 頃	19:00 頃
歩行時間			
難 易 度	初心者向き	初心者向き	初心者向き
交通手段	ﾏｲｸﾛ or ﾏｲｶｰ	列車	マイクロバス
宿泊施設		日帰り	日帰り
温　　泉		有り	有り
参 加 費	1,2000 円	交通費	3,000 円
申込期限	満員になり次第	２０日(月)まで	満員になり次第
集　　約	米田テイ子	水江美栄子 43-4947	松園朱實
	0957-26-0146	江崎幸子 26-4819	0957-26-6895
	ブナの原生林、御池のカルスト地形と話題豊富な山。	今回は上浦から山頂を目指します。 早咲きのダンギクにあえるかも・・・。	北松白岳(379m) 清々しい高原の雰囲気を満喫できる尾根歩き 不老山(288m) 松浦潟の海岸美がみごとな家族ハイキングの山
感想提出	9/23	10/3	10/7

10月の山行計画

部	技術研修部	自然保護部	山行部
月　　日	２４日(土)～２５日(日)	２８日（水）	３１日（土）
山　　名 （行事）	五島の山（七岳・父が岳・笹岳	有喜ロマン小路歩き	大船山(東尾根紅葉登山)
地　　図	三井楽・玉之浦		大船山・久住
集合場所	長崎埠頭フェリー8:00 発	諫早駅バスターミナル 8:40 発	諫早駅裏ﾛｰﾀﾘｰ 6:20 西諫早駅前　　6:30
		ニュータウン経由	
帰着時間	福江港フェリー16:40 発	１６時頃	２０時頃
歩行時間			
難 易 度	一般・　初心者可	初心者向き	一般・初心者可
交通手段	フェリー他	路線バス	マイクロバス
宿泊施設	荒川温泉(竹中旅館)		
温　　泉	有り		有り(時間の都合による)
参 加 費	１５０００円	バス代個人負担	５０００円
申込期限	２０日(火)まで	２７日(火)まで	満員になり次第〆切
集　　約	米田テイ子	水江美栄子	松園朱實
	0957-26-0146	0957-43-4947	0957-26-6895
	七ツ岳(432m)福江の西部、岐宿町と玉之浦との境にあり、花崗斑岩のホルンフェルスでできた岩峰。７つの岩峰が鋸の歯のように見えます。 父ガ岳(8461m)五島列島で一番高い山。	有喜港迄（ニュータウン経由） 有喜ビーチ解散	久重山群、大船山の東側の今泉登山口より伽藍台経由。紅葉が真っ盛りの頃です。
感想提出	9/23	11/7	11/10

お知らせ

夏山に向かって　再チェック！！

梅雨明け宣言を聞かぬまま８月を迎えようとしています。会員の皆様方は、元気に夏山を楽しんでいらっしゃることと思います。

早々に梅雨も明け、本格的な夏山シーズンが到来することでしょう。

遭対部から残念な報告があります。

私たち長崎県連の仲間が、２００９年７月２３日　１０時３０分北アルプス　剣岳で７０メートルの滑落事故を発生しました。幸いにも事故後の対応が良く、怪我の程度は右額裂傷、左手中指骨折、左手首脱臼でした。現在、事故者は長崎の病院で治療中です。事故者本人はもちろん周りの方々、山の仲間の皆さんは大変だった事でしょう。事故の詳細と原因・対策は今後の報告を待つこととして、今回の事故を受けて再度、命を大切にし、事故を起こさない事をみんなで決意し、計画に無理はないか、体力は充分か、山の情報は、異常気象への対応は等などを再度確認し、夏山の楽しい思い出のページをみなさんのアルバムに追加されることを願ってやみません。

長崎県勤労者山岳連盟　　２００９年７月３１日

理事長　　川原　一之

遭難対策部長　　冨永　正勝

社説

中高年登山

引き返す勇気を持って

悪天候に見舞われた北海道大雪山系のトムラウシ山（2141㍍）と美瑛岳（2052㍍）で、登山客が相次いで遭難し、旅行会社のツアーに参加していた人やガイドら50～60代の計10人が命を落とした。

山岳史上に残る大惨事だ。中高年に「百名山」ブームが広がるなか、悲劇から厳しい教訓を得ねばならない。

この時期の大雪山は、雄大な峰々に一斉に咲く高山植物が人々を引きつける。一方で夏とはいえ、北海道の2千㍍級の山々の気象条件は、本州の3千㍍級に匹敵するという。山頂付近で風雨にさらされれば、体感温度は簡単に0度以下になる。体の熱が急速に奪われる低体温症が、多くの犠牲者を出した一因となったようだ。

低気圧の通過で山の天気は荒れていた。18人中8人が死亡したトムラウシ山のツアーが、1泊した避難小屋を出た時には強風が吹いていた。不安に思った人もいたというが、ガイドは出発を強行した。体調を崩して落後する人が続出し、一行はちりぢりになった。

北海道の夏山の危険を知っていたならば、小屋で天候回復まで待つべきだった。なぜ下山を急いだのか。

一行は旭岳温泉を出発し、3日間で40キロ余りを縦走する予定だった。疲労もたまっていただろう。悪天候を予想して、もっと手前で引き返すこともできたはずだ。

ガイドの責任は大きいと言わざるをえない。十分な知識や経験を持っていたのか。どこで判断を誤ったのか。旅行会社の安全確保策はどうだったか。北海道警が捜査を始めたが、二度とこんな遭難が起きないよう、解明を進めてもらいたい。

旅行会社が募集し、気軽に参加できる「ガイド付きツアー」の落とし穴もありそうだ。募集時にコースの難易度などが示されるが、ガイドは各地からやってくる参加者の技量や体力を把握しきれないだろう。初対面の参加者同士、仲間の不調を気遣うことが十分できるだろうか。

参加者は「高い料金を払ったのだから無理をしてでも決行を」と言うかもしれない。日程はどうしても制約される。だが、安全あっての登山だ。旅行業界は自らツアーのあり方を問い直さなければならない。

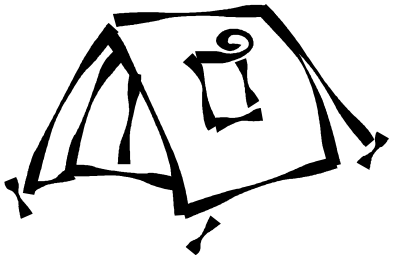
年々増える遭難者のうち60代以上が半数を占める。「山の高齢化」はこれからも進むだろう。いくら鍛えていても、疲労の回復には年齢の影響もある。経験への過信もあだになる。山を楽しみ続けるためにも、愛好者はいま一度、自分のレベルや体力を冷静に判定してほしい。

夏休みに計画がある人は、行程をよく吟味し、体調や装備をしっかり点検する。そして、引き返す勇気も忘れずに山に持って行こう。

低体温症の予防

登山の医学ハンドブックより

体熱産生能力以上に体熱が放散して体温が保持できなくなった状態を低体温症，その究極状態を凍死という．体熱産生低下の原因は疲労困憊か飢餓，体熱過剰放散の原因は保温の破綻である．その誘因は衣服系構築の失敗，雨や汗で濡れる，風に吹き曝される，などである．予防は，そうならないよう事前に心がける，という一語に尽きる．冬山に行き暮れたら早めに行動を停止し，風当たりの少ないところでツェルトを被って，持てるだけの衣服を重ね着する．その際一番下に新しい肌着を着ること．その上に，これまで着ていたものや予備衣料を原則通りに重ねる．そうしておいて，湯を沸かして飴・チョコレート・甘納豆のようなものを溶かし，少しずつ何回にも分けて飲む．体が暖かいうちになるべく眠るのがよい．ただし睡眠剤・アルコールは厳禁．低体温症は夏でも起こり得る．極端な薄着で行動したり雨に濡れたりした状態で疲労困憊に陥いるのは危険である．また，山中で低体温症が治療できるなどと思ってはならない．まず不可能である．それを念頭に置いて，くれぐれも不用意に山に入らぬよう，常に上記衣服の原則を遵守されたい．またカイロは，治療にはまったく無力だが，ビバーク時の保温の足しとして案外役に立つので冬山には必携である．



７月・８月の山行報告

7 月 11(土)～12 日(日)　韓国岳(1700m)、獅子戸岳(1428m)、新燃岳(1421m)、中岳(1332m)

〈参加者〉川原　佐原　鎗水　山下　中村ｼ　川内　中野　下釜　中須賀　井星　山口ｲ
田村　兵庫　田中ｼ 石倉(こもれび)　松元(ﾗﾘｰｸﾞﾗｽ)　和田(えびの)　計 17 名

〈行　程〉1 日目　6：15 西諫早～八代～人吉～炭化木の谷～えびの高原キャンプ村
2 日目　8：00 えびの高原キャンプ村～8：15 韓国岳登山口～9：35 韓国岳～
11：15 獅子戸岳～12：50 中岳～14：00 下山～14：45 白鳥温泉～19：40 諫早

〈感　想〉

出発後すぐに雨が降りだし、降ったり止んだりしていましたが金立で休憩。

高速は八代＝人吉が雨で通行止めとなり、一般道への出口が渋滞しました。その後もしばらく渋滞が続きました。球磨川の増水を脇目に、岩と民家の風情ある様子に、時間があったらこんな道をゆっくり走りたいと思いました。球泉洞で休憩。みんなでパンを翌日用に購入しました。焼き立てではなくても、なかなか美味しかったです。そして人吉から再び高速に乗りました。

バライチゴ

渋滞のせいで予定より時間が遅れ、雨も降り続いたため、高千穂峰は今回中止した方がいいのではという判断になり見送りました。最近中高年の遭難が報じられていますが、オレンジでは今回のように無理はせずに的確な判断をしていると感じています。

えびのキャンプ場

それから高千穂峰の代わりに炭化木を見に行くことにしました。古宮址横から森に入り、しばらく歩くと「つつじヶ原」と呼ばれる所に出ました。そこはミヤマキリシマが多く群生しており、花の時期に来たら綺麗だろうなと思いました。その後炭化木の谷へ。途中夏つばきの白い花が咲いていました。少し小ぶりのオオヤマレンゲにも出会えました。炭化木の谷は初めて見る光景でした。炭化木とは、新燃岳噴火の際の火砕流によって立ち木のまま瞬時に炭化したもので、火砕流堆積物に埋もれたものが風雨等の浸食によって姿を現したものと聞きました。脆く壊れやすく風化による破損だけでなく、心無い人間の手による変化もあると聞き残念に思いました。

夜は温泉付きのえびの高原キャンプ場でした。ちょっと塩辛い（？）すき焼きと手作りの漬物、美味しい酒で楽しい時間が過ぎました。そんな中まだまだ宴は続いていましたが、私はお先に寝ることに。

翌朝 8：00 キャンプ場発。出発までの僅かな時間を利用して、川原さんからロープワークの個人講習を受けました。時間がなかなかとれず、参加したことのない私を気遣って下さったことと思います。ありがとうございました。バスで韓国岳登山口へ。いよいよ縦走です。所要 5 時間弱と聞き、ちょっと不安をおぼえました。硫黄山のそばを横切り 1 合目へ。天気が良いと三合目過ぎると視界が開けてくると聞いていましたが全く開けてきません。岩がゴロゴロしている足場に注意しながら登りました。やっと登った山頂では 360 度の大パノラマのはずが、白一色の世界で景色を楽しむことができず残念。記念撮影後、長い下りから次の獅子戸岳へ。ここも全く展望がききませんでした。小休止の後次なる新燃岳へ。ここも白い世界。でも時折サッとはれて新燃岳火口湖がエメラルドグリーンの姿を現しました。シャッターチャンスとばかりにカメラを構え、数秒で隠れてしまう景色を何度もファインダーに収めました。次は中岳へ。木製の階段は山を保護するためだそうです。中岳で昼食。天候も回復し、頭を隠した高千穂峰を見ながら、是非今度登ってみたいと思いました。

高千穂の峰

さあ最後の下山開始。山頂から木枠の登山道を進むと岩場の急な下りがあり、その後は、高千穂を眺めながら今度は石畳の登山道を進みました。高千穂河原でゆっくり組と合流し、白鳥温泉で汗を流して帰路へ。車中ではビールで喉を潤しながら話が盛り上がりました。

今回、高千穂峰には行けず残念でしたが、代わりに炭化木を初めて見ることが出来ました。計画をされた技術研修部、食料品の買出しや用具の準備をされた皆様お疲れ様でした。ありがとうございました。

（田中静香 記）

7 月 24(金)～28 日(火)　奥穂高岳山行感想

〈参加者〉　鎗水律夫　兵庫芳隆　中須賀孝正　篠原弘二　中村士規　田中静香　山下ちず子

〈行　程〉　7/24　かもめ 34 号諫早 16:04 発＝のぞみ 37 号＝さわやか信州号夜行バス
7/25　上高地 6:00 着 ホテル 7:25 発　本谷橋 12:15 着ランチ　涸沢小屋 14:30 着
7/26　涸沢小屋 8:05 発　横尾山荘 11:00 着
7/27　横尾山荘 7:50 発　新村橋 8:25 着　パノラマコースへの分岐 9:32 着
アルペンホテル 1:37 着
7/28　上高地 10:40 発＝しなの 14 号＝(中部国際空港)ＡＮＡ373=長崎 19:15 着

〈感　想〉

アルプスは 2 回目だが、準備の段階でも雨のことが頭から抜けなかった。トムラウシでの事故があってその事も憂鬱な気がした。いつもならあけてるはずの梅雨もあけきらず。

それでも諫早駅に集まった時メンバーの顔は皆明るい。博多駅で皆お気に入りの弁当を買って新幹線へ。

新大阪からは夜行バス。

朝、バスが着いたらそこは上高地だった。

雨は降ってない！皆、足取りも軽やかに梓川にそってまず、最後の宿、アルペンホテルへ。そこからは梓川の左岸を横尾大橋まで、ゆっくり歩く。

かっぱ橋

去年と同じように、「ホタルブクロ」や「オオウバユリ」が歩きの目を楽しませてくれる。

横尾大橋では 20 分ほど休憩して、小説「氷壁」の舞台となった屏風岩をながめ、本谷橋までいっきに歩く。ここで、昼食。上高地のレストランで買った弁当。少しパラついて並んで写真を撮った雨も止んで、本谷橋の上で私は自分の体重をもんだ。さて、ったりした。少し橋が揺れてなり、鎗水さんのせいではないかと一人きーティーを抜き ここからは、登りがきびしく半ほど急登が続はピッチをあげ、いろんなパた。前日、涸沢つ抜かれつしていく。1 時間景色だった。距いたあと、おおきな雪渓に出あった感じ。夏小屋のホームページで見たポールで示され離にして 3 百～4 百メートル道というルートが踏み跡とて、鎗水さんの足跡に合わせて歩いた。(現実には歩幅がたりなかった。苦笑)

屏風岩

キヌガサソウ

涸沢小屋についたのが 2 時半。この頃はどしゃぶりの雨になっていた。

予約してあった個室にはいり、濡れているものの乾燥をまずすます。こじんまりとした清潔感のある小屋だった。夕方、さっそく、ビールを飲みながら夕食。やっぱり、おいしい！このビールのために山に登るのかな？疑う余地なし。！外は雨。

まあ、明日のことは明日考えよう。

翌日(7/26)天候の悪化で穂高を断念。急きょ、横尾山荘に向かう。涸沢小屋を８時出発。

ゆっくり花の写真を撮りながら・・・。11 時、横尾山荘着。ここもやっぱり雨が降ってるので、山荘の中で弁当を食べる。弁当を食べても満足感が得られずまた、ラーメンを食べた人(山下です)もいた。(びっくり！おいしいので)

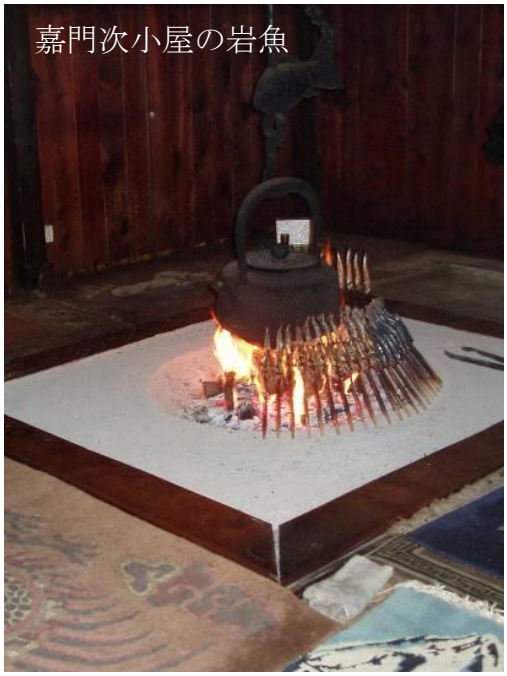
ここは、気持ちの良いお風呂がある。濡れた物を乾燥室にもっていったりしてるうちにお風呂が入れる時間(4 時)になり女性組はすぐはいる。どこから来られたのか中高年らしい女性と世間話でリサーチ。ツアー登山で大切戸(ダイキレット)のコースをやはり雨で断念して降りてきたとのこと。やはり、われわれの判断は正しかったのだ。

奥又白谷

しかし、なんとなくエネルギーも時間ももてあまし、明日は新村橋から涸沢に向かうパノラマコースを分岐まで登ってみることにする。

(7/27)横尾山荘７時５０分発。新村橋に８時 25 分頃着いてそこから、急登を行き「氷壁」のモデルの方のケルンなど見ながら分岐には９時半に着。ここから涸沢にアタックする方法もいいかな？などといいながら、降りて嘉門次小屋につく。名物の岩魚を食べる。そばの人もいる。アルコールも相変わらず進む。長野県酒販から感謝状が届くかも？

嘉門次小屋


嘉門次小屋の岩魚

そして、最後のアルペンホテルに着いて、山の汗を流した。夜の御馳走のおいしかったこと！ワインも赤と白を２本あけた。日本を代表するワインソムリエ、田崎真也のお墨付きワインはことのほか美味しく信州の懐石料理によくあっていた。なんか、パックツアーに来たみたいな感じ・・・。ホテルの壁にはわれわれが行けなかった穂高の写真がかざってある。何度も眺めて今度はあのコースからって思いを強くした。アルプスは何度行ってもいい所。また、行きたいですね。同行した皆さんお世話になりました。

（山下ちずこ　記）

たすけて～！

伯耆大山雪山訓練に思うこと

坂 口 荘 一

参加者８名の感想・報告文も既に６稿が逐次ニュースに掲載され、残るは私を含め２人のみとなった。

今年は雪の大山で訓練と登山を行う企画が「県連盟」と「オレンジ」の双方で進められたため、坂口はどちらに参加すべきか迷ったが、知識を身につける機会を少しでも多くしたいとの思いから、結局、県連の準備会で座学と実技訓練を受け、本番はオレンジの企画に参加することとした。

県連の準備会では１月 13 日に最初の打合会、１月 27 日から３回の座学、２月 11 日と 28 日に実技訓練を受講した。鑓水、米田の両氏も部分参加された。座学では、杉山講師（朝霧）から雪山歩行に必要な用具、冨永講師（東部）から冬山の気象とテント生活技術、岡田講師（ミラン）から冬山登山の概念と要素、技術、計画、装備の基本を学んだ。実技は長崎市民の森で杉山講師からピッケルの使い方と滑落停止技術、アイゼン歩行、ザイル技術等を教わった。技術習得だけでなく、他の会の参加者とも交流が出来て有意義で楽しい準備訓練であった。

オレンジでは４月１日、西公民館ロビーに参加者が集い、冬山の気象、大山の地形と積雪状況、残雪期のコース等について勉強会を行い、役割分担、装備、食料、宿泊場所等について打合せを行った。

４月 17 日～20 日、いよいよ本番の記事は、ニュース５月号に松園氏、６月号に川原、米田、中須賀、山崎の各氏、８ 月号に篠原氏がそれぞれ詳しく、楽しい文を記載されたので私の駄文は省略したい。

実は、私の頭の中で「雪山登山」についての認識に整理が出来ていない部分があって、この文章を書くにおいても視点が定まらず困っているのである。県連の冬山技術講習会の実施目的は、①各会・クラブの登山技術統一とレベル向上。②基本姿勢として冬山は登山の集大成で長期展望が必要。③参加者の意欲向上、認識、心構えとして事前学習、トレーニングを重視する。と位置づけてある（準備会資料）。

いったい「雪山登山」とはなんぞや？　唯単に雪道を登って頂上に着き、降りてくる？　雪の山にテントを張って寝泊まりをする？　雪の難路を危険を冒して命綱を頼りに歩く？　厳冬期の富士山や雪・氷のエベレスト級登山を目指す？　その他いろいろ？　おそらく全てをひっくるめて考えればよいのであろうが、それがなかなか割り切れない。つまり、私の頭の中は「雪山登山」で完全に道迷いを起こし、遭難している状態なのだ。　先般、トムラウシ岳で多数の遭難者が出た。その一人で亡くなったガイドの吉川さん（広島）は、かつて私がツアー山行に参加したとき隣に並んで写真に収まった方である。遭難に至るきっかけは些細なことに始まり、次第に悪条件が積み重なっていくことで悲惨な事態が生じるような気がする。私の頭の中の整理も急がないと、とんでもないことになりそうだ。「誰かー！　助けてー！」

涸沢小屋

涸沢の雪渓

シナノナデシコ

夏つばき

ホンシャクナゲ

新燃岳の火口湖

朝もやの焼岳　7/28

高千穂神社